

アルケイア―記録・情報・歴史―

第一〇号 二〇一六年三月 一〇九―一二二頁

南山アーカイブズ

特集Ⅱ 「展示を利用した自校史教育の可能性」

高校・中学における自校史教育の可能性

中尾 浩康

南山高等学校・中学校男子部

Possibilities of Teaching a History of One's Own School at the Junior and Senior High School Level

Nanzan Boy's Junior and Senior High School

NAKAO Hiroyasu

Archeia: Documents, Information and History
No.10 March, 2016 pp.109-131
Nanzan Archives

一 はじめに

二 「展示を利用した自校史教育」「高校・中学における自校史教育」を実施する場合の現状と課題

(1) 施設との連携の問題(場所・収容力・人員等)

(2) カリキュラムや授業時間等の問題

(3) 教師の専門性や意識の問題

(4) 高校・中学で自校史教育を行う意義・内容・手法等の問題

三 南山高等学校・中学校(男子部)における自校史教育の可能性

(1) 授業における可能性

(2) 学校行事・課外活動等における可能性

(3) その他の場面における可能

四 おわりに

高校・中学における自校史教育の可能性

中尾 浩康

一 はじめに

今回依頼を受け、「展示を利用した自校史教育の可能性」に関し、高校・中学の現場の視点から報告する。私の学問的な専門分野は歴史学（日本古代史）で、また高校・中学の現職教師であることから社会科教育（歴史教育）に関しても教育実践を行っているが、アーカイブズ学や自校教育・自校史教育（以下、自校史教育と表現）に関しては門外漢である。不備の多い内容となるが、何卒御容赦願いたい。

常設展示室は一月下旬に開館したが、高校・中学（以下、高・中とも表記）では一二月は定期考査等で授業は殆どない。また現状では、史資料に関する情報自体も不足している。故に本報告は、展示を利用した高校・中学における自校史教育に関し、既に行った授業に関しての検証よりも、今後の高大連携や授業実践の可能性・構想に力点を置いた内容となることを、予め御承知置き願いたい。

二 「展示を利用した自校史教育」「高校・中学における自校史教育」を 実施する場合の現状と課題

本報告にあたり、先行研究を確認した。簡単に、現在までの自校史教育の流れを振り返っておく。

一九八〇年代、各大学では年史編纂事業が相次いだ。その研究成果を自校の教育に反映させる形で、一九九〇年代半ばから自校史教育は行われるようになった。関西学院大学（一九九五年）、明治大学・早稲田大学・九州大学（一九九七年）、名古屋大学・京都大学・立教大学・神奈川大学（一九九九年）等が早い例で、今では多くの大学で実施されている。大学での自校史教育は一通り整って、それらの総括・検証とともに新たな課題や展開が生まれつつあるのが現在の状況と言えそうである。

その新たな展開の主たるものが、「展示を利用した自校史教育」や「高校・中学における自校史教育」であろう。自校史教育で実施主体となっているのは各大学の文書館や史料センターだが、展示室を持っている大学自体が多いたいとは言えず、近年整備が進んだ大学博物館が自校史の展示を担っている学園も少なくない⁽³⁾。また、「高校・中学における自校史教育」は、広島大学⁽³⁾・日本大学⁽⁴⁾・立教大学（立教学院）⁽³⁾等、こちらもまだ僅かのようなのである。ましてや、展示を利用した高校・中学での自校史教育となると、展示室と附属高校・中学をもとに有する学園に限られるわけで、更に限定される。昨年（二〇一四年）五月に展示室がオープンした立教学院が早い方で、この課題はまさに最新のテーマと言えそうである。

さて、「展示を利用した自校史教育」や「高校・中学における自校史教育」を実施する場合、高校・中学では大学のようにはいかない問題点がいくつもある。まずはその点を指摘したい。

南山学園のみならず多くの高校・中学でも共通するであろう問題点として、(1) 施設との連携の問題(場所・収容力・人員等)、(2) カリキュラムや授業時間等の問題、(3) 教師の専門性や意識の問題、(4) 高校・中学で自校史教育を行う意義・内容・手法等の問題(なお、(1)～(4)は密接に関連する)等が考えられる。

(1) 施設との連携の問題(場所・収容力・人員等)

近年、少子化の影響等から都心回帰を図る大学が増えているが、多くの学園は蛸足キャンパスが一般的である。意欲的な高大連携が実施されている例として、近隣では名古屋大学と附属高校・中学校があるが、それは両者が同じキャンパス内にあるという立地上のメリットも大きい。南山大学と高校・中学(男子部・女子部)も決して遠いわけではないが、授業間の休み時間に移動することは不可能である。

「ユニバーサル・ミュージアム」を掲げ、南山大学人類学博物館が二〇一三年にリニューアルオープンした。我々高・中の教師は普段の授業で積極的に活用したいが、実際には立地的に難しい。それ故、特別時間割を組むか学校行事に絡めて活用する形になるが、教師にとっては手間もかかる(引率も必要となる)。男子部・女子部の過去の例では、「市内探訪」(班別の遠足)の見学ルートに入れる、「職業体験」で学芸員の仕事を体験する、歴史研究同好会(部活動)の生徒が大学開催講演会のお手伝いをする、教師が展示物を借りて授業で使用する等の連携が行われたが、大学と高校・中学との立地の問題はやはり課題となる。

更に、施設の収容力や人員の問題もある。仮に高校・中学側が遠足等の学校行事で見学させたくても、一学年二〇〇人(他校なら四〇〇人や五〇〇人が一般的)の生徒が一度に見学可能か、展示解説の依頼にも対応できるのか等の問題が生じる。班別・分散研修やークラス(三〇～四〇人)程度の利用が現実的で、必然、高校・中学の現

場では活用の仕方が極めて限定的にならざるを得ない実情がある。

(2) カリキュラムや授業時間等の問題

高校・中学では「学習指導要領」で科目毎の授業時間数や授業内容等が細かく設定されており、大学のように毎年「自校史」の授業を設定することは、カリキュラムや時間数的にそもそも困難である。

高校・中学での最も現実的なやり方は、特別時間割を組むか、普段の高校日本史や中学歴史の授業の中で「自校史」に触れる方法である。ただ、高校・中学の歴史の授業では、用語の多い教科書と受験により、実践的・意欲的な授業を組み込む時間的な余裕が少ない現実がある。また、大学の授業時間は一コマ九〇分あるが、高・中では五〇分・四五分・四〇分等が一般的である。

授業時間や内容面等で、高・中の教師は大学教員よりも自由・裁量の幅が狭いという根本的な問題がある。

(3) 教師の専門性や意識の問題

高校・中学では、同じ社会科教師でも専門分野はバラバラ（地理・世界史・日本史・政治経済・倫理・現代社会）である。学年や校務分掌の固定化を避けるため、社会科教師は全ての科目を教えるのが一般的である。日本史専門の教師なら、授業の中で自校史教育を組み込める者もいようが、例えば倫理専門の教師が日本史を担当した場合、同様に自校史教育を組み込むことができるかと言えば、難しいであろう。

また、高・中の教師は担任業務、生徒指導、部活動、学校行事の運営、保護者対応等、多様な校務に追われる中で、教科書を教えるための教材研究時間を確保するだけでも手一杯というのが、多くの現場の実態である。日々全

く余裕が無い中、学園史を読んで自校史教育の教材を教師自ら一から作成を求められるとなると、むしろ反発する教師が出ることも予想される。そもそもどのような史資料が存在し、それらがどのような意味・価値を持ち、どの程度使用ができるのか（閲覧のみか、貸出可か等）、高・中の教師にはわからないのである。

今後、高・中の教師が使ってみたくなる分かり易い自校史コンテンツ（例えば、企画展図録、貸出パネルや大型複製シート^⑦等の貸出キット、デジタル・映像コンテンツ、ブックレット等）の開発・充実や、使用可能な史資料に関する情報化・公開化（例えば、データベース化等）も求められよう。

（４）高校・中学で自校史教育を行う意義・内容・手法等の問題

高・中における自校史教育の意義は、大学で行う場合と共通する面もあれば、異なる面もあるように思われる。

大学における自校史教育については、どの大学・どの時代にも「不本意入学者」が少なからずおり、誇り・帰属意識・学習意欲等を高める役割や、アイデンティティの形成・共有等が指摘されている^⑧。これらの意義は、入学試験（受験）のある中学や高校の生徒、また出身地や出身校も異なる教職員集団に対しても、共通性・有効性を持つと思われる。

ただ、大学の自校史教育でもよく指摘される「自校の負の側面をどう教えるか」については、大学よりも高・中の場合は精査が必要になると思われる。私は歴史学が専門のため「負の側面」の重要性は理解しており、平素の歴史の授業でも常に心掛けている。しかし自校史の場合、高校生・中学生の発達段階（例えば、鵜呑みにし易い、感情的になり易い等）や、その先に大学進学があるという点等から勘考すれば（例えば結果として、学園に否定的な見方を持つ生徒や、上の大学への進学を嫌う生徒が増えても良いのか等）、教える内容・手法等の事前の検討は重

要となろう。

(1) で触れたように、特別時間割や学校行事を活用するやり方にならざるを得ないのは、(1) のみならず、高校・中学における(2)・(3)の問題も大きい。高・中で自校史教育を実施する場合、まずは意欲的な教師による個人実践に頼らざるを得ないであろうが、その教師が日本史を担当できるのは数年に一回である。大学では、中心となる教員や機関が牽引役となり、「自校史」の講義を開講すれば毎年設定が可能だが、もし高・中で継続的な実施を目指すのなら、その意義を教師間に伝え共有する(4)の作業が重要になる。

ただ現在、多くの高校・中学で、大学教授や著名人等を招いての講演会や土曜講座等が行われている。私の所属する南山高等・中学校男子部でも、「進路の日」「総合講座」「オープンクラス」等、近隣大学の教授や男子部のOBが来校して生徒に講義・講話をする行事がある(資料1)。その他、生徒自治会・高校文化委員会の生徒が、放課後に他校(大学・高校等)の先生を招いて講演会(自主企画)を行っている(資料2)。例えば広島大学では、大学教員が附属高校に向いて自校史教育を行っている⁽¹⁰⁾。これらの場はいずれも一コマ限り(六〇分や九〇分)の授業ではあるが、南山大学の永井英治教授や黒沢浩教授が男子部に来校し、自校史教育の授業を行うこと等は、比較的実現しやすいと思われる。

(4) についても、発祥が大学からではなく、戦前の中学校・高等学校等からである学園の場合は、よりやり易い面があると思われる。南山学園も戦前の旧制南山中学校(現在の南山高等・中学校男子部)が発祥であり、当時、校舎(現ライネルス館)が軍に接収され迷彩色に塗られて使用されたこと、勤労働員中の南山生が空襲で亡くなっていること等は、生徒に「戦争」を実感させる好素材となる。戦争関係の史資料や、戦時中の東南海地震関係の史

【資料1】2015年度・高2「総合講座」一覧

2015年6月24日(水) 高2「総合講座」担当者一覧

基調講演 (9:00～9:45)

大学	学部	職	講師	タイトル	担当教員	教室	人数	プロジェクター	スクリーン	PC
1 南山	入試課	入試課長	伊藤 聡		全員	合同	全員			

第一部 (10:00～11:30)

大学	学部	職	講師	タイトル	担当教員	教室	人数	プロジェクター	スクリーン	PC
1 中央	FAX 法学部	准教授	宮本 航平	「企業間取引のルールは誰が作るのか？」	岡本	第1理科室	38	○	○	持参
2 明治	FAX 経営学部	専任講師	鷲見 淳	グローバル化と企業の国際化	朝内	合同教室	49	○	○	持参
3 東京理科大学	FAX 理学部	准教授	佐中 薫	量子コンピュータの研究	長久保	第3理科室	48	○	○	持参
4 名城	FAX 薬学部	准教授	高谷 芳明	薬学部で広げよう 君の未来!!	矢野	パブリックルーム	15	○	○	持参
5 立命館	メール 生命科学	教授	稲田 康宏	現代社会を支える科学—触媒の働きを通して—	宮本	第4理科室	18	○	○	持参
6 藤田保健衛生	メール 医学部	准教授	前野 芳正	医学部におけるコミュニケーション、患者（感染症）の診断	岩瀬	社会科教室	27	○	○	持参

第二部 (13:00～14:30)

大学	学部	職	講師	タイトル	担当教員	教室	人数	プロジェクター	スクリーン	PC
7 関西学院	FAX 総合政策	教授	八木 康夫	関西学院大学総合政策学部で建築デザインを学ぶ	岡本	第1理科室	34	○	○	○
8 早稲田	FAX 理工学部	教授	小柳津 研一	分子をデザインして創る：エネルギーを貯める有機分子を例に	長久保	第3理科室	26	○	○	持参
9 名古屋工業	FAX 工学部	教授	森田 良文	人を助けるロボット、リハビリロボット	宮本・村瀬	大学見学	61	×	×	×
10 同志社	FAX 文学部	教授	中井 義明	ギリシャ神話、悲劇、そして歴史	矢野	パブリックルーム	30	○	○	○
11 岐阜	メール 教育学部	教授	早川 万年	教師を目指すみなさんに	岩瀬	社会科教室	25	×	×	×
12 南山	FAX 外国語学部	講師	今井 達也	コミュニケーションを学んでみよう	朝内	第4理科室	19	×	×	×

【資料2】生徒自治会・高校文化委員会
企画 特別講演会



2013年11月15日、於：パソコンルーム
「『英国王のスピーチ』から英語を学ぶ」（都築
雅子中京大学教授による講演）

資料等は、地域の歴史を掘り起こしていく上でも貴重である。

近年、歴史教育の世界では、戦時中の学校日誌を活用した授業実践の成果が報告されている。^①また、博物館で実施されてきた様々な連携の取り組みには既に蓄積があり、^②現在では高大連携・高大接続の推進^③や、歴史学と歴史教育の連携の動きも進展しつつある。今後、「展示を利用した自校史教育」や「高校・中学における自校史教育」を実施していく場合、大学における自校史教育の実践例のみならず、近似性の高いそれらの分野の成果にも目を配っていく必要がある。アーカイブズ学や学園内のみに完結しない広い視野を持てるか否かも、質の高い自校史教育を目指す上では極めて重要になってくると思われる。

三 南山高等学校・中学校（男子部）における自校史教育の可能性

（1）授業における可能性

前章（1）については、南山アーカイブズ設立に伴い、場所がライネルス館に移ったことで（大学からは離れた）小・中・高とは近くなった。これにより利用の可能性が広がったのは確かである。

また、前章（2）・（3）についても、男子部では比較的实现が可能な土壌が既に存在している。男子部の社会科は六年一貫を生かした独自カリキュラムをとっており、二〇一五年現在、中一で「世界Ⅰ」（地理と世界史の融合）、

【資料3-1】高2「社会探究ゼミ」授業風景



2015年度・後期Aコース、於：社会科教室
「戦争に隠された「震度7」」（本校教諭によるゼミ）

中二で「世界Ⅱ」（中一から継続）と「日本Ⅰ」（主に日本前近代史）、中三で「日本Ⅱ」（日本近代史と公民の融合）、高一で「日本史」「政治経済」「倫理」、高二で「世界史」「政治経済」「倫理」「現代史」（世界史・日本史と現代社会の融合）と「社会探究ゼミ」（後述）、高三で「世界史」「日本史」「政治経済」「倫理」となっている（新課程移行時に改編）。勿論担当者にもよるが、正規の授業の中でも、例えば中三「日本Ⅱ」や高二「現代史」の授業の中に自校史教育を盛り込むことは可能であろう。

加えて男子部では、私をはじめ複数の社会科教師が「地域」の視点の重要性を認識している。例えば「世界Ⅰ・Ⅱ」の授業は、ヨーロッパ中心史観（白人中心史観）に陥らないよう地域別（東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中央アジア・アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ大陸・オセアニア等）の授業が展開されており、また「日本Ⅰ・Ⅱ」の授業でも中央中心史観（英雄史観）に陥らないよう東海地域の視点を加味した授業を行っている教師が複数いる。男子部は他校と比べても、正規の授業の中で自校史を扱うことはやり易いであろう。

更に男子部では、「本質的な学びに迫る」ことを目標とし、三年前から高二文系で「社会探究ゼミ」（学校設定科目）を開講している（資料3-1-3）、二〇一五年度は火曜七時間目（一四時四〇分～一五時二五分の四五分）、半期二回・通年二四回程度）。担当者により内容も形態も様々だが、私は「地域から学ぶ日本史」と題し、生徒による調べ学習と発表が中心のゼミを行っている。

男子部で継続的な自校史教育を目指していくなら、この授業枠を活

【Bコース】

前期 「ヨーロッパ中世世界を考える」

担当：宮川先生

ゼミ参加者各自が「ヨーロッパ中世の諸問題」からテーマの一つを選び、普段、探究活動を続けて、レポートを書く。途中で、順次中間発表をする。

一方、今や古典となって読み継がれている増田四郎著『ヨーロッパとは何か』（岩波新書）を共通テキストにして、発表のないときは読み進める。地理的な概念としてのヨーロッパではなく、ヨーロッパの歴史的な構造や特殊性、ヨーロッパ社会の成立などを扱う。今日、EUを考えるとき、新たな意味で参考になるだろう。

後期 大学とは何か——歴史の変遷から探る—— 担当：岩瀬先生

世界中の高校生の大学進学率は約60%（2011年現在）となっており、現代では大学に進学することに、もはや疑問を持たなくなりつつあります。では、そもそも大学はいつ、どこで、どのような目的で作られ、そしてどのような歴史を辿ってきたのでしょうか。本講座では、吉見俊哉『大学とは何か』を読み進めていき、大学の歴史の変遷を学ぶことで社会における意義と役割を考え、「大学に行く」ことの意味について考え直す機会としたいと思います。

活版印刷術の発明や国民国家の形成といった、世界史Bの授業で学ぶ出来事と大学との関係を紐解きながら、中世ヨーロッパでの大学誕生から、戦後日本における大学改革までの大学の歴史を探り、「大学とは何か」について考えていきます。また、テキスト以外にも、適宜アメリカやイギリスの大学の仕組みや授業形態を日本の大学のものと比較し、現在の大学では何が行われているのかを紹介していく予定です。

テキスト…吉見俊哉『大学とは何か』岩波新書、2011年

【Cコース】

前期 旧約聖書が語る人間の生き方

担当：ダシオン先生

聖書の「旧約聖書」には、イスラエル民族の歴史、律法、預言、文学などが、約千年にわたって多くの人々によって書かれ、編集されて出来上がった。つまり、これは現実味のない単なる宗教の抽象的な話ではなく、人間の生活と歴史に基づいた本当の人間の生き方が丁寧に説かれていることをぜひ学んでいただきたいと思います。

旧約聖書の物語を取り上げながら日本の神話、昔話、文学との類似を考えていくのもこの探究の一つの魅力だと思う。

後期 「イエスの素顔とは」

担当：濱口先生

新約聖書中のイエスはいかなる人物であったのか。聖書には「大笑いした」とか「冗談を言った」とか言った記述はない。沈着冷静、完全無欠の堅物のようなものであったのか、それとも…

このゼミでは、新約聖書を紐解きながら、イエスの姿を様々な角度から探求していきたいと思う。まずは、「新約聖書とはどのような書物か」からはじめ、知識人たちが語る「イエス像」に迫りつつ、各自の考えるイエス像を描いていきたい。

遠藤周作の『私のイエス』と『イエスの生涯』は必読図書として、さらには「イエスと親鸞」、「イエスとルター」、「イエスと寅さん」といった比較検討を通してイエスの輪郭に触れていければなあと思う。そのためにも下記の参考文献をいくつか読んでもらいたい。

参考文献

『新約聖書 新共同訳』日本聖書協会（←必携）、『新約聖書 訳と註』田川建三（作品社）、『イエスという男』田川建三（作品社）、『キリスト教思想への招待』田川建三（勁草書房）、『私のイエス』遠藤周作（祥伝社）（←必読）、『イエスの生涯』遠藤周作（新潮文庫）（←必読）〔後略〕

【資料3-2】 2015年度 社会探究ゼミ コース・講座紹介 *資料から抜粋

	前 期	後 期
Aコース	地域から学ぶ日本史 (中尾先生)	戦争に隠された「震度7」 (村瀬先生)
Bコース	ヨーロッパ中世世界を考える (宮川先生)	大学とは何か―歴史の変遷から探る (岩瀬先生)
Cコース	旧約聖書が語る人間の生き方 (ダシオン先生)	イエスの素顔とは (濱口先生)
Dコース	『御曹司島渡』から読む 中近世日本の対外観 (水口先生)	百姓のくらし (半澤先生)
Eコース	ヨーロッパ商人が見た中近世の世界 (酒井先生)	環境問題 (生物多様性を考える) (宮下先生)
Fコース	日本と中国から「近代」を考える (岡野先生)	テニアン島から (奥岡先生)
Gコース	『ハックルベリ・フィンの冒険』から 19世紀アメリカ社会を考える (菅井先生)	「南山生によって考察された、大人と社会のためのメルヒェン集」～『グリム童話』を学問する～ (岡本先生)
Hコース	憲法の極意～政治とは如何にあるべきか～ (佐々木先生)	新聞から読み解く現代社会 (田中先生)

【Aコース】

前期

地域から学ぶ日本史

担当：中尾先生

中学や高校で活用している教科書は、対象が「全国」である為、当然、有名な人物や出来事中心の記述になります。また、多くのテストや受験では、英雄や中央中心の歴史用語をひたすら暗記し、その知識量をもって優劣を競っています。しかし、これは実は「歴史学」ではありません。

本授業では、愛知県（尾張・三河）・名古屋市等、地域の歴史や地域の史資料を素材に、皆さんに調査・発表を行ってもらいます（どこか1箇所は、現場に足を運んで下さい）。大学に入ると、文系ではゼミ発表、理系ではポスター発表等、研究発表や論文作成が当たり前になります。本授業では、地域の歴史を学ぶと共に、その基礎的な作業についても学ぶことになります（使用テキスト：『尾張の歴史 ガイドブック』名古屋博物館、2003年、700円）。

将来、この地域で生きていく者、他の地域で生きていく者、いずれにもいつか必ず「地域を知ることの重要性」に気づく時が訪れます。自分の「故郷（ふるさと）」について学ぶことができる貴重な機会をとらえ、前向きに取り組んで下さい。

後期

戦争に隠された「震度7」

担当：村瀬先生

日本が第二次世界大戦の末期である1944年に発生した東南海地震、1945年に発生した三河地震は当時の日本の最大震度である「震度7」を観測し、非常に多くの犠牲者や被害をもたらしたにも関わらず、翌日の新聞では「被害はほとんどない」として被害写真も一切報じられなかった。これらの地震は意図的に「隠された」のである。

これらの地震に関して、地震がどのように発生したのか、当時の新聞記事はどうであったか、東南海地震と三河地震では何が違ったのか、実際に被災した人の体験談などを知ることを中心にゼミを行います。 使用教材：戦争に隠された「震度7」1944東南海地震1945三河地震（吉川弘文館）

【資料3ー3】 「社会探究ゼミ」 Aコース前期・中尾ゼミ 予定表
 2015年度社会探究ゼミ Aコース前期 「地域から学ぶ日本史」 担当内容・発表順序一覧 (社会科教室) 担当：中尾

回	月 日	順番	内 容・単 元		参考教材・担当ページ	担当者
1	4月28日		ガイドランス (趣旨説明+発表順決定)			中尾
2	5月12日		濃尾地震と地域社会 (予定)			中尾
3	5月26日		(「毛織王国」の誕生——官織雑産業の盛衰——)			中尾
4	6月2日	1 2 3 5	1 狩猟・採集の時代+2 稲作のはじまった頃 2 古墳とその時代 + 4 古代の尾張 3 窯業 + 6 中世の尾張	概要・中間発表12分 概要・中間発表12分 概要・中間発表12分 概要・中間発表12分	p.4～p.7 p.8～p.11 p.12～p.17 p.24～p.27	S2 R君 S2 S君 S2 T君 S2 S君
5	6月23日	4 5 6	4 尾張藩の成立 + 9 城下町の人々 5 近世尾張の文化 6 名古屋市の成立と近代産業	概要・中間発表12分 概要・中間発表12分 概要・中間発表12分	p.28～p.29, p.34～p.35 p.38～p.41	S2 T君 S2 R君 S2 R君
6	6月30日	7 8 9	7 14 戦争と市民 (1) 招集・戦時下のくらし ←戦争を中心に 8 戦争と市民 (2) 空襲・復興する名古屋 ←焼け野原からの復興を中心に 9 15 なりわい (生業・農業・産業等) + 16 まつり (祭・信仰・風習等)	概要・中間発表12分 概要・中間発表12分 概要・中間発表12分	p.44～46 p.46～47 p.48～51	S2 I君 S2 K君 S2 T君
			現地調査：どこかカ所以上、関連する場所を実際に行って調査・取材。 遺跡・史跡のほか、博物館や資料館等でも良い。 →発表しシマ作成 + レポートの作成にも取り掛かっておくこと。			
7	9月8日	1 2 3 5	1 狩猟・採集の時代+2 稲作のはじまった頃 2 古墳とその時代 + 4 古代の尾張 3 窯業 + 6 中世の尾張	調査・全体発表17分 調査・全体発表17分 調査・全体発表17分	p.4～p.7 p.8～p.11 p.12～p.17	S2 R君 S2 S君 S2 T君
8	9月15日	4 8	4 尾張藩の成立 + 9 城下町の人々 8 近世尾張の文化	調査・全体発表17分 調査・全体発表17分	p.24～p.27 p.28～p.29, p.34～p.35	S2 S君 S2 T君
9	9月29日	6 12	6 名古屋市の成立と近代産業 12 名古屋市の成立と近代産業	調査・全体発表17分 調査・全体発表17分	p.38～p.41	S2 R君
10	10月6日	7 14	7 14 戦争と市民 (1) 招集・戦時下のくらし ←戦争を中心に 14 戦争と市民 (2) 空襲・復興する名古屋 ←復興・戦後を中心に	調査・全体発表17分 調査・全体発表17分	p.44～46 p.46～47	S2 I君 S2 K君
11	10月13日	9	15 なりわい (生業・農業・産業等) + 16 まつり (祭・信仰・風習等)	調査・全体発表17分	p.48～51	S2 T君
			子備 もしくは 総括			中尾

用するのがまずは最も現実的であろう。試案として、例えば「地域から学ぶ戦争」と題して、私がこの地域に残る戦争遺跡等を扱い、永井英治教授が数時間、自校史（戦前や戦中等）の授業を担当するという高大教員のコラボ講座はどうであろう。もしくは、前期に黒沢浩教授が「南山と人類学・考古学」、後期に永井英治教授が「南山と戦争」等の講座を直接開講することも可能である（それぞれ通年でも可能で、時には人類学博物館や南山アーカイブズの学芸員・職員の方々、博物館実習を受講している大学生等が授業を行っても良い）。あるいは、それぞれの館の企画展等に高校生を直接関与させても面白いであろう。

男子部校舎とライネルス館は距離が近く、休み時間中の移動も可能である。授業の場所をライネルス館内の多目的室に設定し、講義をしながら展示室を見学したり、史資料整理を行うこともできるだろう。大学教員の授業を、時間の空いている高・中の社会科教師も聴講したり、授業のサポートに入ったりすれば、同時に高・中における自校史教育の担い手育成も可能となる。高校教師と大学教員が平素の授業づくりで協力・情報交換しあうことは、本格的な高大連携や教育実践への第一歩にもなる。

今年度一〇月六日の「社会探究ゼミ」では、「戦争と市民」に関する生徒二名の発表の後、僅か一〇分程の時間であったが、戦時中の旧制南山中学の写真（【資料4】）を見せながら、当時の南山生の生活やライネルス館が貴重な戦争遺跡でもあることに触れた。その授業に関して、次のような感想が見られた。

・南山も例外ではなく戦時下の影響を受けていたということが分かった。いつもつかっていて、親しみのある土地や学校が巻き込まれているということが強く心に響いた。戦争のドキュメンタリーや報道で特攻や玉碎やらを聞くよりも、自分が学んでいる学校が巻き込まれていたということのほうが、戦争の悲惨さを感じれた気がする。（T君）

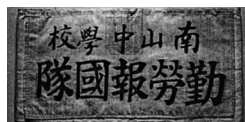
【資料4】 戦時中の写真 ＊いずれも『南山高等・中学校創立70周年記念写真集 南山』（南山高等・中学校、2004年）より



1938年（昭和13年）勤労奉仕（第6回生卒業アルバムより）



1941年（昭和16年）査閲の一日 厳しくなった教練の授業（第6回生卒業アルバムより）



勤労報国隊腕章（軍需工場に動員されたときのもの）
旧制中学校第10回卒業生
卒業五十周年記念誌『青春の軌跡』（1955年発行）より



1945年（昭和20年）軍隊により迷彩色に塗られた校舎
（敗戦後昭和20年10月22日に軍隊撤退後の運動場から写す。人物はすべて中学生）

・この話を聞いて、自分たちの今いる場所が軍に接収されていた、とかを聞いてとても驚いた。少し短かったのでもっと具体的に話を聞いてみたかった。〈R君〉

・身近にある建物や場所で過去にそのような出来事があったということ、またその状況の写真を見ることが戦争への考え方が変わった。〈S君〉

・今でこそ、高校生はもうすぐやってくる大学受験に向けて全力で努力することができが、昔だったら戦争に行く必要があり、それで生きて帰ってくる事もできるかどうかなので、昔の事実を知って、これからも伝えて行きたいと思う。〈R君〉

・実際に今自分が通っている学校が、戦争に関わっていたとは全く思っていなかったので驚いた。今となつては遠い昔のことなのであまり実感がわかないが、いかに当時の人達にとって戦争が身近なものであったのかということがわかった。〈T君〉

・現在、身近に戦争の傷跡を直接感じられる場所がありません。なので、自分が通っている学校が軍の司令部になったと聞いたときは大変驚きました。また、学校という学びの場まで戦火が及んだという戦争の悲惨さは、今後二度とあつてはならないと感じました。〈I君〉

・今では南山のライネルス館が戦争と関連があるようには見えないけれど、実は関連があるというふうに、身近に気づかないだけで関連しているものはたくさんあるんだなと感じた。〈T君〉

・戦時中の南山については実は全く今回まで知らなくて、聞いてびっくりした。当時の南山生や教員も亡くなっているということ、どれだけ苦しい状況に南山が置かれていたかということを、奥深いところまで知ることができた。〈T君〉

【資料5】生徒による文化祭での企画展示



2015年度 文化祭 高校生徒自治会・執行部 特別企画
「南山の歴史と校舎」2015年9月19日・20日

・戦争といっても勉強や授業だと、東京大空襲や知覧特攻隊など、主要な場所のことが多いので、あまり身近ではない部分もあったが、南山の話だとより身近に感じることができてよかった。（S君）

一般的な高校・中学のカリキュラムでは、広島大学の事例のように、附属高校の生徒への自校史教育は特別時間割を組み数回の授業で収めざるを得ないのが現実であろう。しかし、男子部の「社会探究ゼミ」枠を活用すれば、全国的にもまだ珍しい本格的な展示を利用した高校・中学での自校史教育や、様々な高大連携の姿を模索・創造していくことも可能になると思われる。

（2）学校行事・課外活動等における可能性

さて、自校史教育の機会とは、授業の枠内だけに留まるものではない。高校・中学の学校生活には、生徒会活動や部活動もある。ここで既に男子部で行われた自校史教育（自校史学習）の事例を紹介したい。

本校は今年度（二〇一五年度）四月から、三年掛かりの新校舎建築に入った。今年度一杯で現校舎が解体されることから、昨年度（二〇一四年度）と今年度の文化祭では、二年連続で南山の歴史や校舎に関する展示企画が登場した（両年とも生徒達の議論の中で自然に出てきた企画で、その決定自体に教師は全く関与していない）。

昨年度の文化祭では高校文化委員会が（「男子部の校舎について」、今年度の文化祭では高校生徒自治会執行部が（「南山の歴史と校舎」）、

展示企画を行った【資料5】。生徒達は、学園史に関する本や資料を集め、時には大学史料室（現南山アーカイブズ）に足を運んで史資料を調べた。また歴代校長に取材をしたり、スタイロフォーム等で昔の校舎と新校舎の模型を作製したりした。本校の文化祭は例年六〇〇〇人程の来場者があるが、今年は戦後七〇年という節目であったこともあり、来場者の反応も良かった。特に戦前・戦中の南山の姿については、驚いた様子を見せる人が多かった。

なにぶん、男子生徒が作った展示のため、大人から見ればまだまだ拙いものであることは否めない。また、生徒の発案も新校舎建築がなければ出なかったであろう。とは言え、ただ受動的に講義等を聞くのではなく、発案・企画・調査・展示・発表を生徒自身が全て自発的に行ったことは、「展示を利用した自校史教育」であると同時に、「展示を利用した自校史学習」「自校史を素材としたアクティブ・ラーニング」の一例として、紹介するに値するものと思われる。

（3）その他の場面における可能性

高校・中学は、大学以上に地域や市民に開かれている側面がある。特に保護者との関係は近く、合同保護者会、学級懇談会、授業参観、PTA（本校では育友会と呼称）等、年間に何度も保護者が来校する。特に文化祭、体育祭、合唱コンクール等の学校行事では、非常に多くの保護者が参観に来る。また、入試説明会や体験授業等の学校主催の説明会のほか、部活動の大会や地域の教育イベント、各種検定試験・模擬試験等、休日の校舎貸与も多い。一般市民が訪れる頻度・人数は決して少なくない。

これら全てではなくても、いくつかの機会に展示室が開館していれば、地域・市民への「南山」の教育的・広報的な発信力・存在感が一層高まることは間違いないであろう。多くの博物館・図書館・文書館等では、開館時間の

延長や休日開館等、既に柔軟な運営が行われている。例えば休日であっても、大学の学園祭期間中は特別にこれらの施設を開館している大学は、年々増加している。⁽¹⁶⁾

勿論、勤務形態・人員・経費等、多くの問題が伴うことは承知している。ただ、少子化等、現在の社会情勢における広報的・社会的・教育的意義の大きさを考えれば、今後、視野に入れるべき課題の一つであると思われる。

四 おわりに

平素の業務に加え、更に充実した諸活動を展開していくためには、予算やスタッフの問題は決して避けて通れない大きな課題である。実際、先進的な大学の展示館（例えば、立教学院等）では複数名の専門研究員を置き、既に教育コンテンツの開発・充実に力を入れ始めている。

今年度前期の「社会探究ゼミ」終了時、生徒達に「もし、「戦争と南山」「南山の歴史」等のゼミや授業があれば、学んでみたい（聞いてみたい）ですか？」と質問をした。

・とても興味があります。〈R君他〉

・（おそらくないだろうが）卒業までにライネルス館に入ることがあれば、そういった点にも注目したい。調べることでも南山の意外な歴史を知れるかもしれないので、そのようなゼミがあれば是非参加したい。〈S君〉

・やはり今自分にとって身近なものが戦争中のときどのようなかという具体的なことがわかると、戦争があまり「歴史」に感じられなかった（活字の「歴史」とは全く違う感じがした）。非常に興味深いので、もっと戦時中の自分の学校について知りたい。〈T君〉

・上記のようなゼミがあれば、ぜひ参加したいです。この学校に在籍している以上、学校の歴史を学ぶというのは当然のことだと思います。(I君)

・じぶんの大先輩が戦前・戦中どのように過ごしてきたのかを知ること、自分たちがいかに恵まれているかが認識できると思うので、学んでみたい。(T君)

・時間があつたら、自分の出身校である南山についての歴史を調べたいと思った。(T君)

ほぼ全ての生徒が興味を示す結果が出て、関心が高いことに驚いた。地域や市民(民衆)の視点を高校・中学の歴史教育に組み込むことの重要性については既に論じたことがあるが、身近な学園アーカイブズ(史資料)は、「史資料に語らせる歴史の授業」や「地域の歴史」を構築・発掘していく際の貴重な原資となる。

今後、使用可能な史資料の情報化・公開化、理解し易く活用し易い教育コンテンツの開発・充実、授業における連携等のアウトリーチが実現できていくか(それらを可能とする人員・予算の増加が図られるか)等が、学園全体における自校史教育成否の大きな「鍵」になるものと思われる。それらの充実は、引いては地域・市民に対する学園からのメッセージにもなるのである。

註

(1) 折田悦郎「大学文書館の設置と「自校史」教育」(『神戸大学史紀要』七号、二〇〇七年)、村松玄太「近現代史と自校史教育―各大学における実践を踏まえて(自校史教育を考える)」(『日本大学史紀要』一一号、二〇〇九年)。

(2) 藤田茂「自校史教育における大学史展示の役割と課題―博物館教育の視座から」(『日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要』八二号、二〇一一年)。なお、最新の成果として、鮎京正訓・寺崎昌男・瀬戸口龍一・吉川卓治・西山伸・福岡

猛志「シンポジウムの記録 今、なぜ大学史か―その意義と展望」(『名古屋大学文書資料室紀要』二三号、二〇一五年)がある。

- (3) 小宮山道夫・小池聖一・西原利典・宮本浩治「自校史教育が高校生の進路選択に及ぼす影響に関する研究(1)・(2)・(3)―進路指導の改善と大学に関する情報提供の充実」(『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』三五号・三六号・三七号、二〇〇七年・二〇〇八年・二〇〇九年)。

- (4) 日本大学では近年、日本大学理事長特別研究として自校史教育の推進が図られている(大学HP、<http://www.nihon-u.ac.jp/2014/06/32541/>)。二〇一四年には全国の二桁を超える日本大学付属の高校・中学校が集まり、『日本大学の自校史教育における教育担当者養成の実践的研究―建学の精神の実現をめざして―「日本大学付属中学・高等学校の自校史教育に関する情報交換会」が開かれて(二〇一四年六月一八日、会場・日本大学会館大講堂)。

- (5) 立教学院展示館HP (<http://www.rikkyogakuin.jp/hfr/exhibition/highlv/>)によると、立教池袋中学校・高等学校では中学校選科と高校三年生自由選択で施設見学が行われており、立教新座中学校・高等学校では中学校社会科(各学年)で、高校ではC選択講座「自校史」(高校三年生)で自校史教育が設定されている。

- (6) 前掲註(5)HP参照。「小学生から大学生まで幅広い世代

の児童・生徒・学生の自校史学習に活用できるように、子供向けと大人向けのタブレット端末と大型モニターを設置し、分かりやすい自校史コンテンツを用意しました。(中略)見学後に授業として学習スペースを利用することも検討されています。開館後も、各校と積極的に連携、協力を図りながら教育プログラムを検討していく予定です」とある。

- (7) 貸出キットの開発は博物館・美術館等では一般的だが、近年、文書館でも貸出パネルや複製シート等の開発が進められている。鳥取県公文書館HP (<http://www.pref.tottori.lg.jp/80225.htm>)、井上由紀恵「大型複製シートを活用した利用促進の取組み」(『福井県文書館研究紀要』一二号、二〇一五年)等参照。

- (8) 寺崎昌男「自校教育の役割と大学の歴史―アーカイブスの使命にふれながら」(『金沢大学資料館紀要』五号、二〇一〇年)。
(9) 折田悦郎・小関素明・山内乾史・渡辺隆喜・老川慶喜・西山伸・千葉望・寺崎昌男「自校教育」の意義とその可能性を探る」(『立教大学全学共通カリキュラム 大学教育フォーラム』一一号、二〇〇六年)等。

- (10) 前掲註(3)論文参照。
(11) 田中仁「ボクらの村にも戦争があった―学校日誌でみる昭和の戦争時代」(文理閣、二〇一二年)、小川輝光「学校史で学ぶ関東大震災」、入倉光春「国民学校日誌を読んで戦争を考える授業」、早川則男「『東京大空襲をくぐりぬけて』―中

村高等女学校執務日誌を教材とした授業」（いずれも『歴史地理教育』、順に八〇九号・二〇一三年、八一九号・二〇一四年、八三九号・二〇一五年）。

（12）黒沢浩編著『博物館教育論—学芸員の現場で役立つ基礎と実践—』第三章「連携する博物館」（講談社、二〇一五年）参照。

（13）新たな大学入試改革の中でも、主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習・指導方法の抜本的充実が目指されつつある（「高大接続システム改革会議「中間まとめ」」文部科学省HP、http://www.next.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/033/toushin/1362096.htm）。

（14）歴史学と歴史教育の連携の必要性については、筆者も論じたことがある（拙稿「歴史教育と専門的学知」『歴史評論』七七四号、二〇一四年）。特に大阪大学歴史教育研究会の取り組みが知られているが、二〇一五年には専門分野や高大を超えた連携を目指し、全国学会である高大連携歴史教育研究会が発足した（七月二六日、会場・東京大学）。

（15）前掲註（3）論文参照。

（16）例えば、近隣の大学博物館（南山大学、名古屋大学、岐阜

大学等）でも、学園祭期間中等は週末でも特別開館が実施されている。また、椋山女学園歴史文化館（通称・椋山歴史文化館、椋山女学園大学星ヶ丘キャンパス内）では、地域の学習イベント（二〇一五年度「愛知サマーセミナー」会場校）期間中にも特別開館が行われた。なお椋山女学園では、椋山歴史文化館の分室（「山添展示室」）が二〇一五年五月に中学校・高等学校（山添キャンパス）内にオープンしている。

（17）前掲註（14）拙稿参照。

【付記】

他報告にもあったように、新入生へのオリエンテーションやガイダンス等で自校の沿革や歴史に触れることも有効であろう。また私立大学等では、学校紹介や学校説明会用の配布資料（DVD・パンフレット等）の一部にそれらを収録・掲載している学園も少なくない。なお、シンポジウム中やその後に、「負とは何か」から議論し合うことが重要、「大学生にも難しいのに、高校生・中学生にはより難しいのでは」、「保護者やOBをうまく巻き込んでいくことが有要では」等、貴重な御意見・御感想を賜った。記して感謝申し上げたい。